

第144回 三方限古典塾（'18,10,18）

「南洲翁手抄言志録」（その3）

8 己を喪^{うしな}へば斯^{ここ}に人を喪^{うしな}うふ。人を喪^{うしな}へば斯^{ここ}に物を喪^{うしな}ふ。

（録－120）

（意訳） 己を失う（己のあるべき姿や自信を見失う）と、（信用をなくして）友人を失ってしまう。友人や社会の人々を失うと、何もかも失ってしまう。

（余説） 処世の要諦を示す名言です。己を失うとは、自分の生来の心である本性や自分らしさを忘れ去り、自己を見失ってしまうことです。己を見失ったことによって人から見放されて、全てを失ってしまった例は、歴史上でも現在でも溢れています。自分が自分であることの認識（アイデンティティ）を大切にしたいものです。

（参考） 論語・憲問 39 「己を知る莫^{おのれ}ければ、斯^なち己^{すなわ}むのみ。」

（誰も自分の値打ちが分からんのなら自分から引込むまでだ。）

莊子（内篇・大宋師）「名を行ひて己を失うは、士^{あら}に非ざるなり。」

（名誉に駆られた行いをして心を害うものは、士ではない。）

9 士は独立自信を尊ぶ。熱に依り炎に附くの念、起す可らず。

（録－121）

〔評〕 慶應三年九月、山^{やまの}内容^{うちようどう}堂公は幸村左膳、後藤象次郎を以て便となし、書を幕府に呈す。日^ひふ、中^{ちゆう}古^こ以^い還^{えん}、政^{せい}刑^{けい}武^ぶ門^{もん}に出^いづ。洋^{やう}人^{にん}来^{らい}航^{かう}するに及^{およ}んで物^{ぶつ}議^ぎ紛^{ふん}々^{ざん}、東^{とう}攻^{こう}西^{せい}撃^{げき}して、内^{ない}証^{じゆう}嘗^{かつ}て戢^{おさま}る時^{とき}なく、終^{つひ}に外^{がい}國^{こく}の輕^{けい}侮^ぶを招^{まね}くに至^{いた}る。此^{こゝ}れ政^{せい}令^{れい}二^に途^とに出^いで、天^{てん}下^げ耳^じ目^{もく}の屬^{ぞく}するところを異^いにするが故^{ゆゑ}なり。今^{いま}や時^{とき}勢^{せい}一^{いつ}變^{へん}して舊^{きゆう}規^きを墨^{ぼく}守^{しゆ}す可^べらず、宜^{よろ}しく政^{せい}權^{けん}を王^{わう}室^{しつ}に還^{えん}し、以^{もつ}て萬^{ばん}國^{こく}竝^{へい}立^{りつ}の基^き礎^そを建^たつべし。是^{こゝ}れ則^{すなは}ち當^{たう}今^{こん}の急^{きゅう}務^むにして、而^{しか}て容^{よう}堂^{たう}の至^し願^{げん}なり。幕^{まく}下^げの賢^{けん}なる、必^{かな}之^をを察^{さつ}するあらんと。他^た日^{にち}幕^{まく}府^ふの政^{せい}權^{けん}を還^{えん}せる、其^{その}事^じ實^{じつ}に公^{こう}の呈^{てい}書^{しよ}に本^{ほん}づけり。當^{たう}時^{とき}幕^{まく}府^ふ既^いに衰^{すい}えたりと雖^{いへども}、威^い權^{けん}未^いだ地^ちに墜^{てい}ちず。公^{こう}抗^{かう}論^{ろん}して忌^どまらず、獨^{どく}立^{りつ}の見^みありと謂^いふべし。

（意訳） できる士^{おとこ}というものは、他に頼らず、束縛されず、支配されず、自信をもって行動することを貴ぶ。盛んな権力のある者に付き従うような考えを起こしてはいけない。

（余説） 日向高鍋藩主の三男で將軍家茂や明治天皇の侍読・貴族院議員・公議院議長等を務めた秋月種樹の長い評がついています。幕末四賢候の一人の土佐藩主の山内容堂は將軍慶喜に大政奉還を説いて実現させたことで著名です。このことを高く評価していますが、これについては賛否両論に分かれています。

大名である彼らには、幕政に関与し続けようとし倒幕という考え方はありませんでした。彼の主張はあくまでも幕府と藩主による連合政治であり、公武合体です。一方西郷どんは、大政奉還では幕府の力は温存されたままでこの世は何も変わらない、倒幕以外にありえないと、徹底した戦いを強く主張していました。（9月16日放送・大河ドラマ西郷どん）

（参考） 論語・子路 20 「己を行なうに恥^{はずかし}ずる有^いり。四方^{しやうほう}に使い^{つか}して君命^{きんめい}を辱^はめず。士と謂^いうべし。」（自分に非道なことがあれば、それを恥じる。どこに使いしても、自国の代表として辱められることなく行動する。それが、できる士だ。）

10 本然の真己有り。軀殻の仮己有り。須らく自ら認め得んことを要すべし。
(録-122)

[評] 南洲胃を病む。英醫偉利斯之を診して労働を勸む。南洲是より山野に游獵せり。
人或は病なくして犬を牽き兔を逐い、自ら南洲を學ぶと謂う。疎なり。

(意識) 天の意志と一致して、節義廉恥などの普遍妥当な価値を判別できる「真の自己」があり、身体を備えた外見上の「仮の自己」がある。このように自己に二つあることを自ら認めて、仮の自己のために真の自己を駄目にはしてはならない。

(余説) 人が生まれながらに持っている本心・本性・真の自己を認識できて悟ることは、一般には大変に難しい課題です。これを知るために、真っ正面から取り組むのが「禅」だと思いますが、この「禅」なるものの理解がなかなかの難題です。

評では、西郷どんは真己を守るために、仮己である病んだ胃の治療に狩猟をしているのだから、病がないのに狩猟をして西郷を学ぶというのは愚かなことだと言っています。

(参考) 臨済録「赤肉団上に一無位の真人あり。常に汝等諸人の面前より出入りす。」

(中国・唐の禅僧「臨済義玄」の言行録)

11 雲烟は已むを得ざるに聚り、風雨は已むを得ざるに洩れ、雷霆は已むを得ざるに震う。斯に以て至誠の作用を觀るべし。
(録-124)

(意識) 雲は自然の成り行きでやむを得ずして集まり生じ、風や雨も同様にやむを得ずに天上から漏れてくる。雷も同様にやむを得ずに轟きわたる。これを見て、やむを得ず、あるべくして生ずるものは、この上もなくすぐれた知徳であることを知るがよい。

(余説) 「やむを得ざるの勢い」で、次の項と関連があるので、一緒に考えます。

12 已む可からざるの勢いに動けば、則ち動いて括られず。枉ぐ可からざるの途を履めば、則ち履んで危うからず。
(録-125)

(意識) 十分に考えてから、これが最善であると決定して、やむにやまれない勢いで動けば、いささかも行き詰まることはない。曲げることができない正道を突き進む時は、決して危ういことはない。

(余説) 斉彬公と共に「幕末の四賢候」と呼ばれた、福井藩の松平春嶽、土佐藩の山内容堂、宇和島藩の伊達宗城等の反対を押し切って、幕府軍1万5千、政府軍5千の劣勢であるにもかかわらず倒幕を決意し、敢えて「戦の鬼」となることを覚悟して、鳥羽・伏見の戦いに挑んだ西郷どんの心情は、この二項によるものではないでしょうか。

今年の8月、山口県の山林で行方不明になった2歳男児を、大分県の78歳の捜索ボランティア男性が3日ぶりに、わずか2時間で救出したニュースは、人々に感動を呼び起こしました。これも、「人間の行動」は、それが「やむにやまれぬ」至誠から迸り出る時に、人を感動させ、世を動かすものだと、改めて感じることでした。

今年のノーベル平和賞を受けたコンゴの医師と、(元)奴隷のイラク女性も、「やむにやまれぬ」思いから「性暴力と闘う」活動に尽力したことが、評価されたものです。